

I 全数把握対象疾患の発生動向

1 一類、二類感染症及び三類感染症の発生動向

1) 一類、二類感染症の患者情報

2024 年の埼玉県及び全国の一類、二類感染症の届出数を表 I-1-1 に示した。

一類感染症は、疑似症患者を含め埼玉県、全国ともに届出はなかった。

埼玉県に届出のあった二類感染症は、結核 728 人で、急性灰白髄炎、ジフテリア、重症急性呼吸器症候群(病原体がベータコロナウイルス属 SARS コロナウイルスであるものに限る)、中東呼吸器症候群(病原体がベータコロナウイルス属 MERS コロナウイルスであるものに限る)及び鳥インフルエンザ(H5N1 及び H7N9)の各疾患の届出はなかった。

表 I-1-1 一類・二類感染症の届出数 (2024 年)

疾 患 名		埼玉県	全国*
一類	エボラ出血熱	－	－
	クリミア・コンゴ出血熱	－	－
	痘そう	－	－
	南米出血熱	－	－
	ペスト	－	－
	マールブルグ病	－	－
	ラッサ熱	－	－
二類	急性灰白髄炎	－	－
	結核	728	16,240
	ジフテリア	－	－
	重症急性呼吸器症候群(SARS)	－	－
	中東呼吸器症候群(MERS)	－	－
	鳥インフルエンザ(H5N1)	－	－
	鳥インフルエンザ(H7N9)	－	－

*全国は診断週(1～52週)の集計値

(-:0)

ア 結核

男性 429 人、女性 299 人の計 728 人の届出があり、前年の 762 人と比べ減少した。類型別では患者 472 人、無症状病原体保有者(潜在性結核感染症)254 人、疑似症患者 2 人の届出があり、患者は前年の 523 人と比べ減少した(図 I-1-1)。

男性では患者が 292 人、無症状病原体保有者が 136 人、疑似症患者が 1 人であった。男性は 60 歳以上が 61.3%で、80 歳代 89 人、70 歳代 85 人の順に多かった。女性では患者が 180 人、無症状病原体保有者が 118 人、疑似症患者 1 人であった。女性は 60 歳以上が 59.9%で、最も多い年代は 80 歳代の 74 人であった(表 I-1-2)。

年代別の患者の経年推移では、65 歳以上の割合は前年と同水準であった。また、前年に引き続き小児(0-14 歳)の報告はなかった(図 I-1-2)。

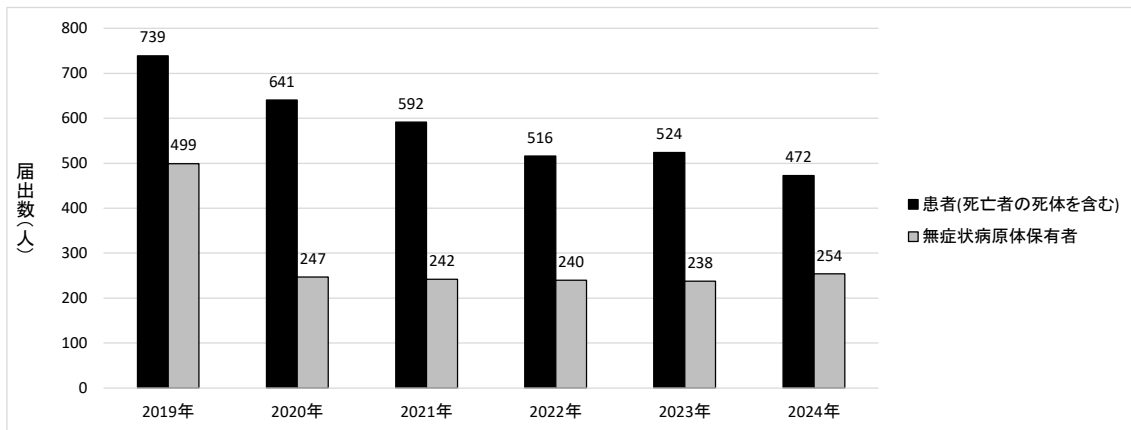


図 I-1-1 結核 類型別届出数 (2019~2024 年)

表 I-1-2 結核 類型別の性年齢階級別届出数

年齢階級	男性				女性				総数
	患者	無症状病原体保有者	疑似症患者	小計	患者	無症状病原体保有者	疑似症患者	小計	
10歳未満	—	5	—	5	—	8	—	8	13
10歳代	1	4	—	5	—	3	—	3	8
20歳代	25	18	—	43	19	14	—	33	76
30歳代	17	14	—	31	8	11	—	19	50
40歳代	9	15	—	24	10	18	—	28	52
50歳代	42	16	—	58	17	12	—	29	87
60歳代	42	22	—	64	8	10	—	18	82
70歳代	56	29	—	85	28	24	—	52	137
80歳代	78	11	—	89	57	17	—	74	163
90歳以上	22	2	1	25	33	1	1	35	60
合計	292	136	1	429	180	118	1	299	728
割合	40.1%	18.7%	0.1%	58.9%	24.7%	16.2%	0.1%	41.1%	100%

(-0)

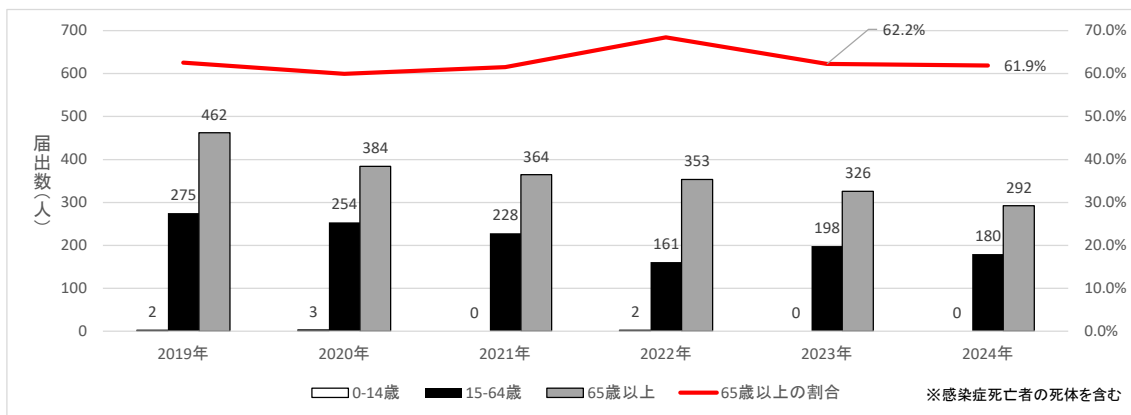


図 I-1-2 結核 年代別患者届出数及び 65 歳以上の割合 (2019~2024 年)

2) 一類、二類感染症の病原体検出状況

一類感染症の病原体の検出はなかった。

二類感染症の結核菌は、遺伝子中の多重反復配列の反復数を株間で比較する Variable Numbers of Tandem Repeats 法 (VNTR 法) 等の遺伝子解析を埼玉県衛生研究所及びさいたま市健康科学研究センターで実施している。2024 年に採取された患者検体からの分離菌株 174 株について遺伝子解析を行った。これらの解析結果では、北京型は 121 株 (69.5%)、非北京型は 51 株 (29.3%) であった (表 I-1-3)。さらに、北京型の系統推定では 78 株 (64.5%) が祖先型、39 株 (32.2%) が新興型であった (表 I-1-4)。北京型の割合は 2021 年以降、約 70% で推移している (図 I-1-3)。また、北京型における新興型の割合は、2019 年～2021 年の約 24% に比べ、2022 年～2024 年は約 32% と増加している (図 I-1-4)。

表 I-1-3 結核菌の北京型別

結核菌の北京型別(株数)			
	北京型	非北京型	型別不能
株数	121	51	2
割合	69.5%	29.3%	1.1%

表 I-1-4 北京型の系統推定

北京型の系統推定(株数)			
	祖先型	新興型	推定不能
株数	78	39	4
割合	64.5%	32.2%	3.3%

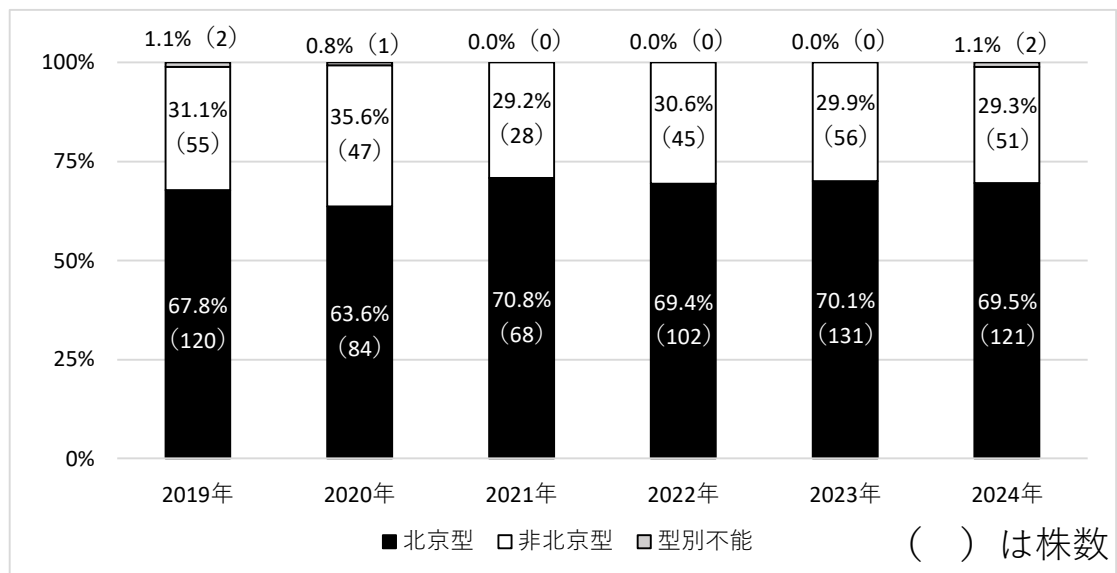


図 I-1-3 結核菌北京型別割合 (2019 年～2024 年)

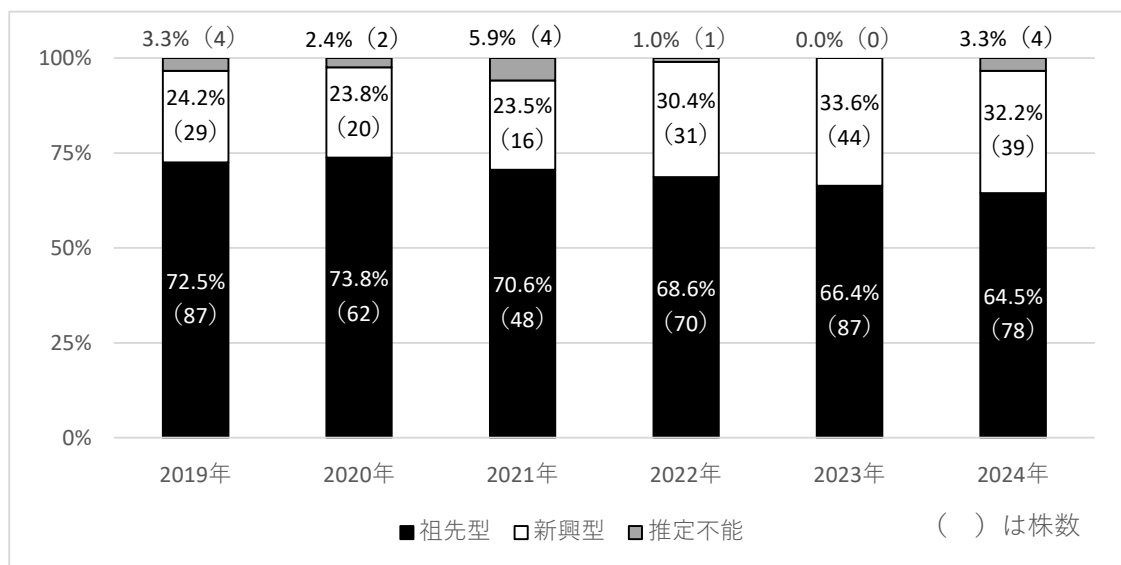


図 I-1-4 北京型の系統推定割合 (2019 年～2024 年)

3) 三類感染症の患者情報

2024 年の埼玉県及び全国の三類感染症の届出数を表 I-1-5 に示した。

埼玉県に届出のあった三類感染症は、細菌性赤痢 2 人、腸管出血性大腸菌感染症 183 人、腸チフス 2 人であった。

表 I-1-5 三類感染症の届出数 (2024 年)

疾患名		埼玉県	全国*
三類	コレラ	－	2
	細菌性赤痢	2	74
	腸管出血性大腸菌感染症	183	3,748
	腸チフス	2	42
	パラチフス	－	7

*全国は診断週(1～52週)の集計値 (－:0)

ア 細菌性赤痢

9 月に 20 歳代男性及び 60 歳代女性の計 2 人の届出があり、前年の 9 人から減少した。前者は無症状病原体保有者で、菌種は *Shigella flexneri*(B 群)であった。後者は患者で、菌種は *Shigella sonnei*(D 群)であった。いずれも診断方法は、便からの分離・同定による病原体の検出であった。推定感染地域は、前者がバングラデシュ、後者が国内であった。

イ 腸管出血性大腸菌感染症

男性 87 人、女性 96 人の計 183 人の届出があり、前年の 167 人より増加した。症例の年齢は 1 歳から 80 歳代まで幅広く分布し、年齢階級別では、20 歳代が 57 人と最も多かった(表 I-1-6)。過去 5 年と比較すると、10 歳未満の届出は少なく、

20 歳代の届出は多かった(図 I-1-5)。類型別では、患者 113 人、無症状病原体保有者 70 人で、前年と比べて患者は同水準であり、無症状病原体保有者は増加した(図 I-1-6)。月別の届出数は 8 月が最も多く 23 件であった。例年の流行期に該当する 6 月～9 月の届出数は 79 人であり、前年の 101 人と比べて減少したが、1～5 月及び 10～12 月の届出数は 104 人で、前年の 66 人と比べて大きく増加した。(図 I-1-7)。

患者の O 血清型は、O157 が 78 人(OUT 同時検出 1 人を含む。)と最も多く、次いで多かったのは O26 の 12 人であり、いずれも前年と比べて同水準であった。その他の血清型は O103 及び O111 が各 5 人、O115 が 2 人、O8、O55、O76 及び O128 が各 1 人、OUT が 7 人であった。

無症状病原体保有者の O 血清型は、O157 が 21 人、O26 が 2 人で、いずれも前年の届出数を下回った。その他の血清型は、O91、O115 及び O128 が各 4 人、O8(O25 同時検出 1 人を含む。)及び O103 が各 3 人、O55 が 2 人、O111、O121、O145、O168、O178 及び O181 が各 1 人、OUT が 20 人、不明が 1 人であった。その他の血清型の合計は 47 人で、前年の 21 人から大きく増加した(図 I-1-6)。

溶血性尿毒症症候群(HUS)患者は、10 歳代の女性 1 人で確認された。検出された大腸菌の血清型及び毒素型は O157 : H7 VT2 であった。

表 I-1-6 腸管出血性大腸菌感染症 年齢階級別届出数

年齢 階級	総数	性別		類型		血清型		
		男性	女性	患者	無症状 病原体 保有者	O157	O26	その他
10歳未満	6	4	2	6	—	2	—	4
10歳代	23	14	9	17	6	13*	5	5
20歳代	57	27	30	35	22	34	5	18
30歳代	29	12	17	17	12	15	2	12
40歳代	23	11	12	8	15	9	—	14
50歳代	20	6	14	8	12	9	1	10
60歳代	15	7	8	12	3	8	1	6
70歳代	6	3	3	6	—	6	—	—
80歳代	4	3	1	4	—	3	—	1
90歳以上	—	—	—	—	—	—	—	—
合計	183	87	96	113	70	99	14	70
割合	100.0%	47.5%	52.5%	61.7%	38.3%	54.1%	7.7%	38.3%

(—:0)

*O157・OUT同時検出1名を含む

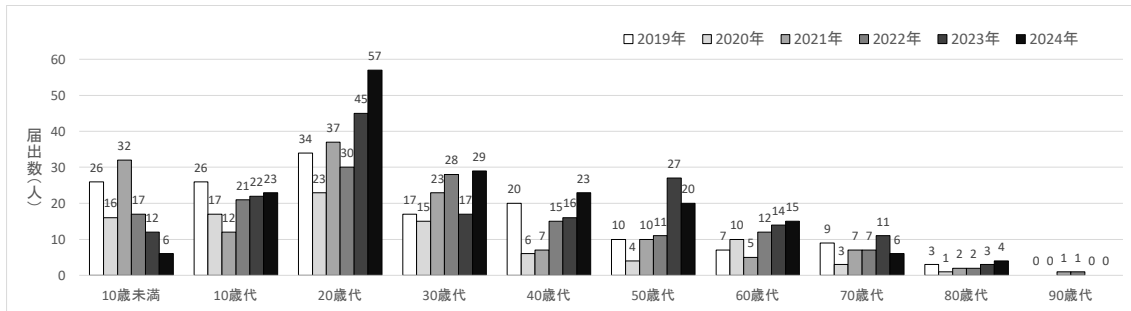


図 I-1-5 腸管出血性大腸菌感染症 年齢階級別届出数 (2019 年～2024 年)

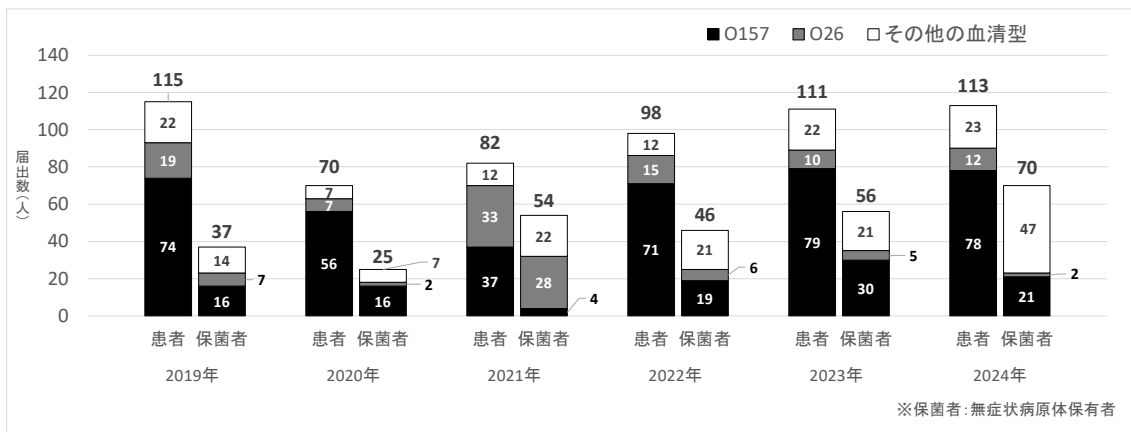


図 I-1-6 腸管出血性大腸菌感染症 類型別-血清型別届出数 (2019～2024 年)

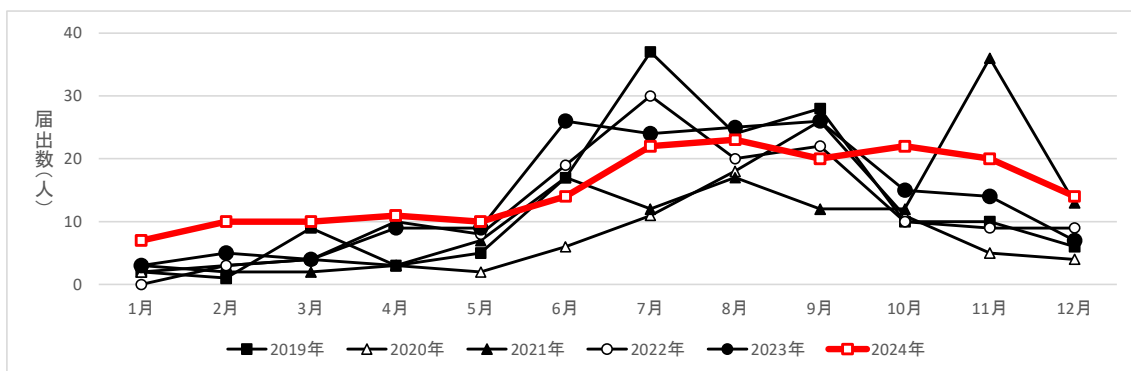


図 I-1-7 腸管出血性大腸菌感染症 月別届出数 (2019～2024 年)

ウ 腸チフス

20 歳代の男性及び 10 歳未満の女性、計 2 人の届出があった。類型は前者が無症状病原体保有者で、後者は患者であった。診断方法はいずれも分離・同定による病原体の検出であり、検体は前者が便、後者が血液であった。推定感染地域はいずれも国外で、前者はインドネシア、後者はバングラデシュであった。なお、後者は現地で診断された症例であった。

4) 三類感染症の病原体検出状況

ア 細菌性赤痢

県内で分離された赤痢菌の菌種は、*S. flexneri* が 1 株、*S. sonnei* が 1 株 の計 2 株であった。このうち *S. flexneri* は海外渡航歴のある患者から分離された。渡航先はバングラデシュであった。国内感染が疑われる株は *S. sonnei* が 1 株であった(表 I-1-7)。

表 I-1-7 県内で分離された赤痢菌数 (2024 年)

分離月	血清型	性別	年齢	推定感染地域
9月	<i>S. flexneri</i> 3a	男	20歳代	バングラデシュ
9月	<i>S. sonnei</i>	女	60歳代	国内

イ 腸管出血性大腸菌感染症

県内で分離された腸管出血性大腸菌は 176 株であった。血清型は、27 の血清型に型別された。最も多く検出された血清型は 0157:H7 で 66 株(37.5%)であった。次いで 0157:H-で 26 株(14.8%)、026:H11 で 11 株(6.3%)であった。毒素型では、VT1&2 が 80 株(45.5%)、VT2 が 52 株(29.5%)、VT1 が 44 株(25.0%)であった。なお、0157:H7(VT2)と OUT:HUT(VT2)が同時検出された症例が 1 件あった(表 I-1-8)。

表 I-1-8 腸管出血性大腸菌の血清型と毒素型 (2024 年)

血清型	毒素型			計
	VT1	VT2	VT1&2	
O157:H7	–	29*	37	66
O157:H–	–	5	21	26
O157:HUT	–	1	2	3
O26:H11	10	–	1	11
O26:H–	2	–	–	2
O111:H–	4	–	2	6
O103:H2	7	–	–	7
O103:H–	–	1	–	1
O8:H28	–	1	–	1
O115:H10	5	–	–	5
O115:HUT	1	–	–	1
O121:H19	–	1	–	1
O128:H2	–	–	4	4
O145:H–	–	1	–	1
O55:HUT	3	–	–	3
O76:H19	1	–	–	1
O91:H–	–	–	1	1
O91:HUT	–	–	3	3
O168:HUT	–	1	–	1
O178:H19	–	1	–	1
O181:H49	–	1	–	1
OUT:H11	1	1	–	2
OUT:H18	1	–	2	3
OUT:H19	3	–	–	3
OUT:H2	–	1	3	4
OUT:H–	5	–	2	7
OUT:HUT	1	8*	2	11
合計	44	52*	80	176

*: 1症例から2つのO血清型(O157 1件、OUT 1件)が検出された例を含む

ウ 腸チフス、パラチフス

腸チフスの原因菌であるチフス菌は1株分離された。ファージ型はDVSであった。患者はインドネシアへの海外渡航歴があり、発症状況から国外での感染が疑われた。

パラチフスA菌の検出はなかった。

表 I-1-9 チフス菌の分離状況（2024 年）

分離月	血清型名	性別	年齢	ファージ型	推定感染地域
3月	S. Typhi	男	20歳代	DVS	インドネシア